

齋藤 充

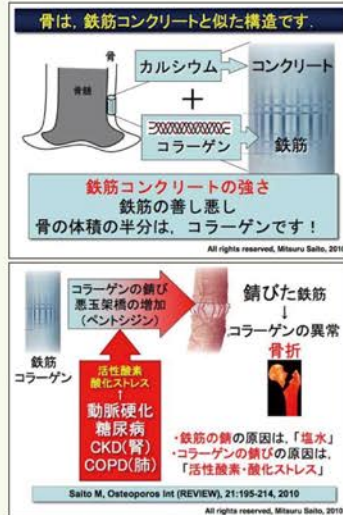
「骨質」という考えを取り入れ、世界に先駆け新たな骨の治療法を確立

文 高橋 誠

Text by Mac Takahashi

学校法人慈恵大学広報推進室長
医療・健康コミュニケーター

日曜劇場『下町ロケット2』がスタートしました。主人公の佃航平(阿部寛)は、技術開発にかける情熱と誇り、大企業との競争に諦めない不断の努力で社内外から慕われる、泥臭く格好いい町工場の社長を演じています。東京慈恵会医科大学附属病院整形外科 齋藤充診療部長もま



た、最先端の内視鏡治療に比べ注目されていなかった「骨質」の研究に、地道な試行錯誤を繰り返しました。

「齋藤先生はまるで病院で寝泊まりしているようです」——早朝6時の回診に、前日オベを終えた患者さんが驚きました。平日の日は変形性膝関節症の人工

膝関節置換手術や外来診察で患者さんと向き合う傍ら、深夜と休日のほとんどを研究に没頭する齋藤医師。カルシウムを多く摂取し骨密度が高くても骨折してしまう症例が多いことに注目し、白い骨が覆う内側のコラーゲン(タンパク質をつなぎとめる構造体。骨の体積の半分を占める)の質「骨質」に問題があることを世界で初めて発見し、関連学会から12の学会賞を受賞。脚気撲滅の功績から「ビタミンの父」と呼ばれた高木兼寛の偉業を彷彿させます。

世界初、「骨質」の新機軸がガイドラインに。

難治性の患者さんに身命を賭す。

建築物のさびた鉄筋のごとく、コラーゲンの老化が骨折を招くのです。骨質コラーゲンの重要性(動脈硬化、高血圧、糖尿病など生活習慣病を合併しやすい)は、国内外の多くの追試で妥当性が証明され、骨粗しょう症治療の世界のガイドラインが変革されました。現在、尿や血

液検査で共通のマーカーを調べ、骨粗しょう症の早期発見、転倒防止、寝たきり予防、死亡リスク低減につなげています。

狭いラボ発の孤独で、泥臭く、勇気ある研究が、難治の骨粗しょう症治療を牽引していることが、下町ロケットとオーバラップし、胸を打ちます。ノーベル賞を受賞された本庶佑先生が新分野に挑戦し大きな成果を生んだことも想起させます。患者さんからの感謝の言葉と、高校時代国体出場経験があり、今も続けるサッカーで鍛えた心身がハードワークの源泉です。

の感謝の言葉と、高校時代国体出場経験があり、今も続けるサッカーで鍛えた心身がハードワークの源泉です。



Profile

学校法人慈恵大学広報推進室長。医療・健康コミュニケーター。東京生まれ横浜育ち。慶応義塾大学経済学部卒。ミスノ広報宣伝部、リクルート広報企画部、米国SPBC社New Design Conceptor (LA在住12年)、仙生露Executive PR Adviser、富士1ばんゴルフ副支配人/経営企画室長/広報室長を経て、2004年より現職。日米複数企業における広報・マーケティング経験から、難解な医療・健康をわかりやすくメディア・社会に伝えるべく、病院広報担当者間の勉強会「病院広報研究会」を立ち上げ、医療・健康コミュニケーション活動を研究中。趣味はゴルフ(Hdcp9)、ワイン(日本ソムリエ協会ワインエキスパート#58)。